Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2010, Vol.12, 115-124.

論　文

対人関係における感受性と認知的統制

小野　恵里香・古川　真人

Interpersonal Sensitivity and Cognitive Control

Erika ONO and Masato FURUKAWA

Some people are sensitive to the behavior and feelings of others. The relation between Interpersonal Sensitivity (IPS) and Cognitive Control (CC) was investigated in a college population (N=366). Responses to questionnaires indicated negative correlations between Interpersonal awareness, Separation anxiety and CC for both sexes. In women, Fragile inner-self was related to Refraining from Catastrophic Thinking, whereas it was not related to Logical Analysis.

Subscales of IPS and CC indicated that high IPS (with the exception of the Need for approval) was related to low CC in women. These findings suggest that variables that are measured by the subscales of the IPS are important for using CC skills.

Key words：Interpersonal sensitivity（対人的感受性）, Cognitive Control（認知的統制）, gender difference（性差）

問題と目的

人間は、本来社会的な存在である。われわれの生活では、他者との相互作用がなければ、その存在自体が危ういものとなる。たとえば、上出・大坊（2009）は、「われわれは様々な他者に囲まれて生活している。家族や友人、恋人など、一個人が関わる対人関係は多様であり、それぞれの関係において認知される自己も相互作用する他者に応じて多様に変化する」と述べている。また、大坊（2006）は、「自分一人だけでは、自分を決して理解できず、他者が存在し、その関係の中にあって、他者との「比較」を通じて自分を捉えることができる」ことや、「その他者との相互作用の中にあって、自分の言動に対して相手がどのように反応するのか、その反応を読み取ることによって、自分の特徴を社会的なものとして初めて理解することができる」ことを指摘している。

そして、過去の受容・拒絶体験が現在の関係における認知や情動に影響し続ける（Bowlby, 1973）ことがわかっている。他者からの受容もしくは拒絶は人間にとって一大関心事であり（本多・桜井，2000）、拒絶されたことを認知すると、人間は失望などの感情を抱き、精神的な健康を損なうとされている（Baumeister & Leary，1995）。しかし、拒絶されたことの認知やそれに対する反応は人によって異なるとされている。

たとえば、本多・桜井（2000）は、食事の約束をしていたAとBが、さらにCを誘ったときに「忙しいから行けない」と断られた場面を例に挙げている。Aは、Cの返事の意図を穏やかに解釈し、別の機会に誘おうと考える。一方でBは、Cの返事から「もしかすると私がいるから断ったのかもしれない」と断ったという行動から大げさに解釈する。Downey & Feldman（1996）は、後者の反応をする人を「拒否を認知しやすく、拒否に対して過剰に反応するような人」として拒否に対する感受性の高い人（rejection sensitivityが高い人）と定義した。さらに、その現象を愛着理論を用いて、「幼少期の受容、拒否された経験が表象として内在化され（内的作業モデルとなり）現在の社会的場面での情報処理を制御している」と説明している。内的作業モデルに基づく対人行動パターンについて、山口（2008）は、一般他者への愛着表象が、関係特異的な愛着表象（恋人や両親、友人といった重要他者）に比べて、より強い影響を与えることを指摘している。ここで言う「一般他者への愛着表象（一般的表象）」とは、「個人が普段感じている、他者への接近可能性や応答可能性、また自己確信や自己信頼感を規定する認

知的枠組み」のことを指している。内的作業モデルが、階層構造性が仮定されていることから、一般的表象は主たる養育者との相互作用から抽出された自他に対する一般的な表象であるとされている。

その養育者からの心理的な自立を達成し始める時期である青年期は、対人関係に責任を持って友人や教師などを中心に広く拡大していく時期でもある。一般的には、第２次性徴の発現などを特徴とする身体的成熟から、就職や結婚といった社会的成熟までの期間を指す。したがって、もっとも長くとらえるならば10歳ごろから30歳ごろであるものの、本研究においては、生活スタイルの大きな変化が見られ、より自己意識が過剰になり自己への注目が高まっている時期にある大学生を対象として焦点を当てる。

とくに、他者との相互作用が必要な対人場面（たとえば大人数の会議場面，少人数での場面，１対１での場面）を経験するときには、どのようにすれば他者との関係を結べるのか、具体的な行動がなされる前にいろいろと思いを巡らすのが通例である（楠見，1995）が、その行動をとる前後に好ましさや楽しさを感じる者もいれば、苦痛感や恐怖感を感じている者もいるであろうと個人差が想定される。

また、自己評価を高く保つことが、青年の社会適応性や行動に重要な役割を果たすことが実証的に示されている（Greenberg, 1992）。中山（2007）は、自己評価を維持するための機能として、発達と共に、他者依存的な自己評価機能と自己注目的な自己評価機能の活性化の度合いが独立していくことを指摘している。この他者依存的な自己評価機能を強くもっている場合、自己評価を維持・安定させるという強い動機を持ちながら、他者の自分への評価（言動、無視、批判）にひどく敏感になり、場合によっては激しく反応を示すと言われている。

その点について、中山・中谷（2006）において開発された「評価過敏性－誇大性自己愛尺度」の評価過敏性において、たとえば、「他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする」「自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺する」という項目が挙げられている。この評価過敏性という概念は、近年、主として対人恐怖（対人恐怖心性や対人不安と研究によって用語が異なる）や自己愛傾向と関連する構造として関連性が研究されており（川崎・小玉，2007；清水・川邊・海塚，2008）、注目されている。たとえば、川崎・小玉（2007）は、「極度に理想化された自己イメージと過度に卑下された自己イメージとの間を揺れ動き、決してその中間のイメージに安定することができない」と評価過敏傾向にある者の自己評価の有り様を説明している。

また、前田・岩永・生和（2005）は、社会的な責任性や問題解決を回避するようなニートやフリーターの急増という現象から、その行動的特徴に見られる自己愛傾向に触れている。自己愛傾向は、これまでに自尊感情など心理的健康の高い指標とも正の相関を示している。その一方で、臨床的知見に基づき、自己愛傾向は、Gabbard（1994）の挙げる「無関心型」と「過敏型」の２つからなっている。両者は、対人的な関わりにおける典型的なスタイルの２つの極に位置し、行動的な特徴や対処の仕方には相違があるが、特に「過敏型」の自己愛傾向者は、「自分自身に対する誇大性は自らの内に留め、自らが傷つけられやすい状況を回避することで自己を防衛し、自己評価を維持しようとする」ために、批判の証拠がないかどうか注意深く他の人に注意を向けている。

つまり、評価過敏性という特徴は、出来事に対する個人の認知的評価によるところが大きく、仮にその人が社会適応性の高い行動や態度をとっていれば、周囲からは比較的察知することが難しい、気づきにくいものだと思われる。しかし、個人の心の中では、反応をコントロールすることに困難さを感じていたり、不快で苦痛なものとして体験していたり、精神的健康を損なう可能性がある反応であることが推察される。本研究では、青年期を対象として、「他者との相互作用のある場面に遭遇、あるいは予測したときにおいて、他者から与えられる評価に対して敏感になり、絶えず意識をしている」という側面に注目する。

臨床心理学的観点における同様の概念として、「他者から与えられる言動や社会的なフィードバック（批判されることや断られること、別れを告げられることなど）によって自己が受ける影響」だけでなく「自己が他者へ与える影響」についての個人の懸念も扱ったものに、Interpersonal Sensitivity（以下、IPS とする）という概念が存

在する。本概念は、Boyce, P. & Parker, G.（1989）がうつ病のリスク要因として臨床観察から提唱したパーソナリティとして、「他者に関する過度で極端な気づきと他者の行動および感情への感受性」と定義されており、江田・日高（2007）は、「他者の対人的な行動に関する不適切感や、誤った解釈によって特徴づけられ、それによって対人的な回避や他者に対する不安を生じるものである」と指摘している。

このIPSは、うつ病の病前性格研究に始まり、オーストラリアのBoyceら（1989）が、長年にわたる臨床観察に基づいて想定された人格特性として提唱されたものである。そのIPSを評価する尺度として、Interpersonal Sensitivity Measure（以下, IPSMとする）が開発されている。このIPSMを用いることにより、非メランコリー型うつ病患者の方がメランコリー型うつ病患者よりも比較して得点が高いこと（Boyce et al., 1993）や、妊娠している女性を対象としたプロスペクティブ研究において、出産前のIPSMの高さが産後うつ病のハイリスク要因として予測されること（Boyce et al., 1991a；Boyce et al., 1991 b）が報告されている。また、大学生を対象とした調査では、IPSの高さには、社会場面と学習場面における自己肯定感や学習場面におけるパフォーマンスの低さや抑うつ症状の高さと関連が見られると報告されている（McCabe, Blankstein, & Mills, 1999）。

わが国においても、佐藤・西岡（1996）によってIPSMが紹介されたことにより、桑原ら（1999）がIPSMの邦訳を行い、日本語版IPSMとして、その尺度の信頼性と妥当性の検討を行っている。なお、この尺度は、「対人意識」（人の評価や考えを気にしやすい傾向：「他の人が私をどのように思っているのか気にかけている」など）、「是認要求」（人からの同意を求めたがる傾向：「人がほめてくれるとうれしい」「他の人が私に怒っていると、心が傷つく」など）、「分離不安」（人から心理的に遠ざかることによって不安が生じやすい傾向:「人と別れるときには、不安になる」など）、「臆病さ」（人に対して遠慮してアサーティブになれない傾向：「相手を傷つけるのでは、と恐れて腹を立てない」など）、「脆弱な内的自己」（人から拒絶されるのではと自己開示できない傾向：「他の人が本当の私を知ったら、私を好きにならないだろう」など）の５つの下位尺度36項目から成っており、適度な信頼性と妥当性を備えた尺度であることが示されている。

しかしながら、日本語版IPSMを用いた従来の研究においては、うつ病の診断研究が中心に行われており、うつ病既往歴のある者にIPSがより高く見られることや、IPSの高さが、幼少期の親の応答的な養育態度の欠如や損害回避（未来の問題の予想における悲観的な心配，不確かさへの恐れ，見知らぬ人に対しての内気になりやすさ，疲れやすさ）と関連性をもつことについての指摘にとどまっている（Sakado et al., 1997; Otani et al., 2008）。

対人場面において、状況から予期して相手への気配りや心配といった対応をとることができたり、他者から自己に与えられる評価をふまえて自分の言語的・非言語的行動を調整することができることは、一般的には「他者配慮ができる」「人間関係を望ましい方向に発展させるリーダーシップをとることができる」としても捉えることができる。このような他者配慮と、先述したIPSのように抑うつにつながるような対人関係についての脅威や危険性を感じやすいパーソナリティ傾向との違いを扱うにあたり、他者を対象として判断した対応をとるまでに個人が心的過程の中で認知・感情・行動の調整や検証を行っていることを考慮すると、その相違点に自己制御（self-regulation）の過程が関与していると考えられる。自己制御は、広義には「反応性，興奮性，覚醒を抑える神経的・認知的・感情的・行動的プロセスの調整」とRothbart & Rueda（2005）によって定義されている。

そこで、本研究においては、IPSが個人の認知的評価に影響を受ける概念であることから、個人の思考を調節する制御の側面に注目する。たとえば、Bandura（1977b）は、「刺激を解釈し検証する過程を通して自分の思考が妥当かどうかを判断し、妥当でない場合は修正し、効果的な認知による制御ができると、ストレスや不安を操作しストレス反応に関する精神的出来事の成り行きを統制して、思考の問題に基づいている多くの困難や苦痛を回避できる」として、認知のネガティブな歪みを統制する機能がある認知的統制（cognitive control）を紹介している。この認知的統制は、Freeman（1989）が臨床場面で用いた治療の認

知的技法を参考に構成されたものである。わが国では、杉浦（2007）が、より日常場面で関係が深いと考えられる技法を選択し、使用の個人差を測定するものに、認知的統制尺度（杉浦，2007）がある。これは、ストレス状況を客観的に分析し積極的に解決に取り組むスキルの「論理的分析」と否定的な思考が浮かんだときにその暴走を防止するスキルの「破局的思考の緩和」の２つの下位尺度から成っており、抑うつの低減効果や、自己効力感や楽観主義といった抑うつを緩和する要因への影響が示唆されている。

通常抑うつなどの問題においては、Segal, Williams & Teasdale（2002）が、特に、問題や自分の思考から距離をおく方略が重要であると指摘し、否定的な思考が非常に高頻度に浮かぶと、否定的な思考内容をどんどん発展させる破局化という傾向が見られるとしている。その際には、杉浦（2008）で示されているように､それにこだわったり、無理に抑制しようとしたりせずに、それが事実ではないことを認識して距離をおけるようになることが重要だという。

以上、本研究では、IPS が認知的統制とどのように関連するのかを検討することを目的とする。日本語版 IPSM の項目には、他者から拒否されると捉える場面や他者が見せる態度や与えられる評価に対して、不安になったり心配をするといった内容が挙げられている。その中には「…気に病む」「…仲直りするまで落ち着かない」「…いつも気にしている」という表現に見られるように、不快感をずっと感じ続けたり繰り返し考えたり、自己（あるいは相手）について注目し続ける状態像がうかがえることから、IPS と状況を経験した後の認知についての自己制御の個人差との関連を調べることは意義があるといえる。

方　法

調査対象者

首都近郊の大学に在籍する１～４年生387名（男性175名、女性212名）を対象に調査を行った。調査用紙の回収後、記入もれや記入ミスで誤回答であったデータを除外し､366名（男性165名､女性201名）のデータを分析の対象とした。平均年齢は19.70歳、標準偏差1.40であった。

調査時期・手続き

調査は、2009年11月に講義時間を利用して、無記名自記式の質問紙調査を行った。調査は、講義後、著者他大学院生による一斉配布による形式で配布・回収を行った。実施の際は著者から学生に注意事項を教示した。

調査内容

１）フェイスシート

学年、年齢、性別の記入を求めた。

２）対人関係における感受性を測定

桑原ら（1999）の Interpersonal Sensitivity Measure 日本語版（以下，日本語版 IPSM）を使用した。項目として用いた日本語版 IPSM 一覧を Table 1 に示す。質問項目に対する回答は、その項目に示された内容に対して、ふだんの自分がどのくらい当てはまるかを４段階（全く当てはまらない：１点，あまり当てはまらない：２点，

Table 1　日本語版 IPSM 下位尺度項目一覧

対人意識	是認要求
自分が他の人に及ぼす影響について気に病む	他の人と親しい関係にあると、安心する
知らない人と会うのは、不安だ	友達とけんかした後は、仲直りするまで落ち着かない
自分の言動について批判されているのではないかと、いつも気にしている	人に相手にされないと、すぐそれに気づく
他の人が自分のすることに批判的だと、気分が悪い	だいたいの人は私を好いていると感じている
他の人がどう思っているか気に病んでいる	親しい人を楽しませるためには、突飛なこともする
他の人が私をどのように思っているか気にかけている	人がほめてくれるとうれしい
	他の人を幸せな気分にすることができる
	他の人が私に怒っていると、心が傷つく

分離不安	臆病さ
人と別れると、動揺する	拒否されるのを恐れて、自分の考えを言うのを避ける
親しい人を失うのではないかと心配する	相手を傷つけるのではと恐れて、腹を立てない
他の人がほめてくれないと、自分が良いことをしたと信じられない	他の人がどう感じているかをいつも意識している
人と別れるときには不安になる	他の人を怒らせたりわずらわせるくらいなら、したくないことでも自分でする
自分の気持ちが他の人を困惑させるのではと恐れている	他の人に腹を立てることは、自分にはむずかしい
批判されることを、いつも予期している	他の人を非難するのではないかと心配する
他の人が自分に満足してくれているかどうか、本当のところ確信できない	誰にでも礼儀正しい
他の人は私を理解していないと感じる	他の人の気持ちを害するのではないかと心配している

脆弱な内的自己
他の人が本当の私を知ったら、私を好きにならないだろう
他の人が本当の私を知ったら、私のことを低く見るだろう
自分の真の姿を知っている人は嫌いである
知り合いが褒めてくれないと、幸せな気分になれない
私の人間としての価値は、全く他の人の評価に依っている

Table 2　認知的統制尺度項目一覧

論理的分析	破局的思考の緩和
そのことが自分にとって何を意味しているのか落ち着いて考えられる	その状況を深刻に考えてしまうとき、いったん考えるのをやめられる
そうなった理由をいくつか考えられる	よい気分はしないけど、破局的（悲劇的）には考えない
どうしたらよいか、思考や行動の選択肢をいくつか考えられる	そのような状態から引き起こされると考えられる悪い結果が頭に浮かんでも、それは自分の想像によるものだと思う
その状況の良い面と悪い面を考え、行動の可能性を探ることができると思う	そのような状況でも明るい希望を持ち、逆境を自分の利益に変えられると思う
自分の状況の捉え方、ものの見方のくせについて考える	その状況から悪い連想を発展させない
問題を解決するような想像をする	

やや当てはまる：３点，非常に当てはまる：４点）で評定を求めた。桑原ら（1999）の指摘に従って、「今現在のこと」というよりも「ふだんのあなたにより近いと思うところに，○をつけて下さい。」と教示している。

本尺度の内的整合性を確認するため、Cronbachのα係数を算出したところ、α=.78となり、良好な内的一貫性が認められたため、以下の分析に使用することとする。

３）認知的統制を測定

認知的統制尺度（杉浦，2007）を用いて測定した。項目一覧をTable 2に示す。12項目から成っており，質問項目に対する回答は，ふだんの自分がどのくらい当てはまるかを４段階（全くできない:１点，あまりできない:２点，まあまあできる:３点，確実にできる:４点）で評定を求めた。「不安なことがおきたときの考え方についてかかれています。それぞれをよく読んでふだんのあなたに当てはまるものを１から４のうち１つ選んで○をつけて下さい。」と教示している。

なお、現在のポジティブな感情状態とネガティブな感情状態を測定する日本語版PANAS（佐藤・安田，2001）16項目（ネガティブな感情状態８項目，ポジティブな感情状態８項目）、他者からの受容拒絶の認知を測定する杉山・坂本（2006）の被受容感・被拒絶感尺度22項目（被受容感８項目，被拒絶感８項目，そのうち先行研究における除外項目６項目）、認知過程における推論の誤りを測定する丹野・坂本・石垣・杉浦・毛利（1998）の推論の誤り尺度（Thinking Errors Scale）19項目、感情のモニタリング機能を測定する感情に関するモニタリング尺度（吉田，2007）27項目、行動－状態志向性を測定する日本語版行動統制尺度90の24項目もIPSのもつ特徴を多面的に考究することを目的として用いているが、本研究では扱わないものとする。

結　果

基本統計量・信頼性

日本語版IPSM得点（36項目合計得点、各下位尺度得点）の性別の基本統計量を算出した。次に、男女差を確認するために、合計得点および各下位尺度得点に対して、性別を要因とするt検定を行った（Table 3）。その結果、合計得点（$t(364)=4.38$，$p<.05$）と「対人意識」（$t(364)=3.42$，$p<.01$）、「是認要求」（$t(364)=5.43$，$p<.01$）、「分離不安」（$t(364)=2.91$，$p<.01$）、「臆病さ」（$t(364)=2.18$，$p<.01$）、「脆弱な内的自己」（$t(364)=2.43$，$p<.01$）となり、女性の方が有意に高い結果を示した。

そして、下位尺度間の相関を確かめた。その結果をTable 4に示す。「是認要求」以外の下位尺度得点と合計得点との間の相関係数は.70以上であり、強い正の相関が認められた。「是認要求」の下位尺度得点と合計得点との相関係数は、.58であったが、比較的強い正の相関が見られ、先行研究とほぼ同様の結果となった。さらに、先行研究において、十分な信頼性と妥当性が実証されているものの、下位尺度の「是認要求」と他の下位尺度との相関の低さが課題点として挙げられてい

Table 3　IPSMの男女別の平均値と標準偏差およびt検定結果

	男性	女性	t値 性差
IPSM　合計得点	92.34 (12.15)	98.00 (12.43)	4.38 ** *男性＜女性*
対人意識	19.05 (3.80)	20.35 (3.46)	3.42 ** *男性＜女性*
是認要求	22.82 (3.21)	24.53 (2.81)	5.43 ** *男性＜女性*
分離不安	19.21 (3.71)	20.39 (4.01)	2.91 ** *男性＜女性*
臆病さ	20.36 (3.73)	21.18 (3.52)	2.18 ** *男性＜女性*
脆弱な内的自己	10.90 (2.50)	11.54 (2.54)	2.43 ** *男性＜女性*

（　）内は標準偏差　　**$p<.01$　*$p<.05$

Table 4　IPSM 下位尺度間の相関係数

	IPSM					
	合計得点	対人意識	是認要求	分離不安	臆病さ	脆弱な内的自己
IPSM　合計得点	−	.82**	.58**	.85**	.79**	.70**
対人意識	.82**	−	.58**	.41**	.55**	.48**
是認要求	.58**	.41**	−	.62**	.40**	.15*
分離不安	.85**	.62**	.31**	−	.55**	.65**
臆病さ	.79**	.55**	.40**	.55**	−	.41**
脆弱な内的自己	.70**	.48**	.15*	.65**	.41**	−

**p<.01　*p<.05

たため、日本語版 IPSM の因子構造を確認するため、36項目を用いて、最尤法プロマックス回転による５因子法を指定した因子分析を行った。その結果、桑原ら（1999）と同様の因子構造は得られなかった。そのため、各因子の内的整合性を確認するため、桑原ら（1999）の下位尺度項目を用いて各因子の Cronbach の α 係数を算出したところ、「対人意識（α=.76)」、「是認要求（α=.62),「分離不安（α=.73)」、「臆病さ（α=.69)」、「脆弱な内的自己（α=.60)」となり、桑原ら（1999）のものとほぼ同様の結果が得られ、どの因子においても良好な内的一貫性が認められたため、下位尺度の指標として用いて以下の分析に使用することとする。なお、「脆弱的な内的自己」は、桑原ら（1999）の結果においては、α=.72であった。この相違について、要因として、先行研究の対象年齢層との違いなどの要因が考えられるが、本研究でも以下の分析に全ての下位尺度を用いることとした。

認知的統制尺度についても、合計得点および各下位尺度得点の性別の基本統計量を算出した。次に、各合計得点に対して、性別を要因とする t 検定を行った（Table 5)。その結果、認知的統制合計得点（t(364)=2.31，p<.05)、「論理的分析」（t(364)=2.38，p<.01）となり，男性の方が有意に高い結果を示した。「破局的思考の緩和」においては，男女の間で有意な差はない結果となった。また、内的整合性を確認するため，Cronbach の α 係数を算出したところ，α=.78となり，良好な内的一貫性が認められたため，以下の分析に使用することとする。

Table 5　認知的統制の男女別の平均値と SD および t 検定結果

	男性	女性	t値 性差
認知的統制　合計得点	28.71	27.60	2.31 *
	(4.26)	(4.83)	*男性＞女性*
論理的分析	17.15	16.47	2.38 **
	(3.80)	(3.46)	*男性＞女性*
破局的思考の緩和	11.56	11.12	1.53
	(2.47)	(2.93)	

(　)内は標準偏差　　**p<.01　*p<.05

各得点間の相関

IPS と、認知的統制との間に関連性があるかどうかを検討するため、日本語版 IPSM の合計得点および各下位尺度の「対人意識」「是認要求」「分離不安」「臆病さ」「脆弱な内的自己」の得点、認知的統制合計得点および各下位尺度の「論理的分析」「破局的思考の緩和」、についての相関係数を男女別に算出した（Table 6、7)。

IPS と認知的統制との関係においては、「対人意識」「分離不安」「脆弱な内的自己」との間に有意な負の相関が見られ、女性のみ IPSM 合計得点との間にもわずかながら有意な負の相関が見られた。「論理的分析」は、女性のみ「対人意識」との間にわずかながら有意な負の相関が見られ、男性のみ「脆弱な内的自己」との間にも有意な負の相関が見られた。「破局的思考の緩和」は、合計得点と「対人意識」および「分離不安」との間に有意な負の相関が見られた。女性のみ「脆弱な内的自己」との間にも有意な負の相関が見られた。

認知的統制についての差の検討

これまでの研究では、IPSM の合計得点の高低のみを用いており、さまざまなプロフィールをもつ対象者の特徴が見逃されてきていた可能性を考慮して、本研究では下位尺度の組み合わせも用いて検討する。注目したのは、Table 4において、「是認要求（以下 NA)」以外の下位尺度得点と合計得点との間の相関係数は .70以上であり、強い正

Table 6　IPSM と認知的統制との相関係数（女性）

	IPSM					
	合計得点	対人意識	是認要求	分離不安	臆病さ	脆弱な内的自己
認知的統制　合計得点	−.19 **	−.32 **	.03 *n.s.*	−.20 **	−.01 *n.s.*	−.18 **
論理的分析	−.04 *n.s.*	−.15 *	.12 *n.s.*	−.09 *n.s.*	.10 *n.s.*	.11 *n.s.*
破局的思考の緩和	−.28 **	−.39 **	−.05 *n.s.*	−.26 **	−.11 *n.s.*	−.20 **

**$p<.01$　*$p<.05$

Table 7　IPSM と認知的統制との相関係数（男性）

	IPSM					
	合計得点	対人意識	是認要求	分離不安	臆病さ	脆弱な内的自己
認知的統制　合計得点	−.13 *n.s.*	−.18 *	.05 *n.s.*	−.18 *	.08 *n.s.*	−.28 **
論理的分析	−.04 *n.s.*	−.04 *n.s.*	.14 *n.s.*	−.05 *n.s.*	.06 *n.s.*	−.31 **
破局的思考の緩和	−.18 **	−.25 **	−.07 *n.s.*	−.25 **	.07 *n.s.*	−.12 *n.s.*

**$p<.01$　*$p<.05$

Table 8　是認要求とその他の IPSM 得点のタイプによる各合計得点と分散分析の結果（女性）

是認要求	是認要求が少ない		是認要求が多い		主効果		
その他のIPSM	低い	高い	低い	高い	是認要求	その他のIPSM	交互作用
認知的統制　合計得点	28.25	28.03	29.58	28.57	1.74	13.64**	0.32
	(4.56)	(4.74)	(3.94)	(5.18)			
論理的分析	16.54	15.53	17.31	16.37	4.44*	6.54**	0.01
	(2.36)	(2.62)	(2.14)	(2.81)			
破局的思考の緩和	11.71	10.50	12.28	10.19	0.10	14.86**	1.06

上段：平均値，　下段：標準偏差　　**$p<.01$，*$p<.05$

Table 9　是認要求とその他の IPSM 得点のタイプによる各合計得点と分散分析の結果（男性）

是認要求	是認要求が少ない		是認要求が多い		主効果		
その他のIPSM	低い	高い	低い	高い	是認要求	その他のIPSM	交互作用
認知的統制　合計得点	29.09	28.52	28.88	28.36	0.08	0.84	0.00
	(4.80)	(3.19)	(4.49)	(4.15)			
論理的分析	17.04	16.96	17.49	17.06	0.34	0.31	0.14
	(3.46)	(2.16)	(3.02)	(2.48)			
破局的思考の緩和	12.04	11.56	11.39	11.29	1.35	0.55	0.24
	(2.40)	(2.44)	(2.56)	(2.49)			

上段：平均値，　下段：標準偏差　　**$p<.01$，*$p<.05$

の相関が認められたが、NA 得点において合計得点との相関係数が他の下位尺度得点よりもやや相関が弱かった点である。このことから、NA 得点の高低と、それ以外の IPSM 下位尺度合計得点の高低を基準として調査対象者を分類し、認知的統制に違いが見られるかを検討する。

まず、NA 得点の平均値を基準として、NA 高群と NA 低群に分類した。そして、NA 得点（高・低）とそれ以外の得点（高・低）というような IPS のタイプをを独立変数、認知的統制の得点を従属変数とした２要因の分散分析を男女別に行った（Table 8、9）。

その他の IPSM 得点に関係なく、NA 得点の高低によって有意に差異が見られたのは、女性で、認知的統制の「論理的分析」であった（$F(1, 197)=4.44$，$p<.05$）。NA 得点に関係なく、

その他のIPSM得点の高低によって有意に差異が見られたのは、女性で、認知的統制の合計得点、「論理的分析」「破局的思考の緩和」であった（女性は$F(1, 197)=13.64$, $p<.01$；$F(1, 197)=6.54$, $p<.01$；$F(1, 197)=14.86$, $p<.01$）。

考　察

本研究の目的は、IPSと認知的統制との関連性について、検証することであった。

まず、IPSと認知的統制について、性差を検討した結果（Table 5）から、IPSは合計得点および下位尺度得点において女性の方が男性よりも高かった。それに対して、認知的統制はIPSと異なり、合計得点および「論理的分析」において、男性の方が女性よりも高いことが明らかとなった。この結果は、先行研究（杉浦，2007）の結果や、関連が想定される「問題焦点型対処方略」では男女で性差が見られないことが多いとする指摘と異なる結果となった。本研究は、個人の問題に対する客観的な検討の傾向に性差が認められる可能性を示したといえる。今後さらなる検討を要する。

次に、性別ごとに、関連性を検討した結果（Table 6, 7）、男女共に、「対人意識」や「分離不安」、「脆弱な内的自己」が高いほど、認知的統制のスキルが低くなるといった中程度の負の関係を持っていることが考えられる。性別による違いとしては、女性において、「脆弱な内的自己」が高いほど、「破局的思考の緩和」のスキルが、男性においては、「論理的分析」のスキルが低くなると示唆された。また、「対人意識」および「分離不安」は高いほど、「破局的思考の緩和」が低くなるといった中程度の関係を持っていることが考えられる。つまり、他者に意思表示をする場面や他者から評価を受ける場面において、その評価を懸念しやすい傾向をもっていたり、ネガティブな未来への予期をしやすかったり、自己評価の低下を防ぐために自己表現を避けやすい傾向をもっているほど、認知的統制のスキルをあまり用いていないという可能性が示された。特に、「脆弱な内的自己」は、男性においては「論理的思考」のスキルと、女性においては「破局的思考の緩和」のスキルとの間に負の関連がみられることがわかった。

また、今回は、IPSMの総合得点においてではなく、是認要求とその他のIPSM得点の組み合わせによって、認知的統制のスキルの差異を検討している。その結果（Table 8, 9）から、「是認要求」の高さに関係なく、IPSMの傾向が高い女性は、自己評価においては、対人場面において他者から受ける評価に重きをおいて価値づけしており、ネガティブな思考が浮かんだ際になかなか別の解釈を検討したり、視点の転換を行うことをせずに、自分への脅威として過大評価してとらわれてしまう状態像が考えられる。

以上、本研究では、IPSと認知的統制との関連から、いくつかの新たな知見が示された。しかし、本研究の結果を一般化するには、調査デザインの観点から限界があると思われる。IPSは多面的な特徴を持っていることが懸念されるため、より広範な研究が望まれる。たとえば、今回は認知的側面を主体とした研究であったが、より詳しく、IPSのもつ制御困難性といった側面を扱うために、自己制御の能力の他の側面との関連について、社会的望ましさや対人行動パターンのような要因を統制して影響を見る手法や実験的手法を用いて検討していく必要があるだろう。これらの検討は、臨床的介入や予防的介入に寄与すると考えられる。

引用・参考文献

Bandura. A.（1977b）. *Social Learning Theory*.（原野広太郎監訳（1979）社会的学習理論．金子書房.）

Baumeister, R. & Leary, M.（1995）. The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a functional human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497–529.

Boyce, P. & Parker, G.（1989）. Development of a scale to a measure interpersonal sensitivity. *Australian and New Zaland Journal of Psychiatry*, **23**, 341–351.

Boyce, P., Parker, G., Barnett, B., Cooney, M. & Smith, F.（1991a）. Personality as a vulnerability factor to depression. *British Journal of Psychiatry*, **159**, 106–114.

Boyce, P., Hickie, I., Parker, G.（1991b）. Parents, partners or personality? Risk factors for post-natal depression. *Journal of Affective Disorders*, **21**, 245–255.

Boyce, P., Hickie, I., Parker, G., Michell, P., Willhelm, K. & Broadaty, H. (1993). Specificity of interpersonal sensitivity to non-melancholic depression. *Journal of Affective Disorders*., **21**, 245-255.

Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss*. Vol.2 Separation: Anxiety and Anger, New York: Basic Books.（J. ボウルビィ．黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）(1991)．母子関係の理論Ⅱ　分離不安　岩崎学術出版）

Downey, G. & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.

江田早紀・日高三喜夫（2007）．対人感受性尺度の作成－因子構造と信頼性，妥当性の検討．久留米大学心理学研究，**6**，43-50.

Folkman, S. (1997). Positive psychological states and coping with severe stress. *Social Science and Medicine*, **45**, 1207-1221.

Freeman, A. *The Practice of cognitive therapy*.（遊佐安一郎監訳（1989）．認知療法入門．星和書店.）

Gabbard, G. O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition. *Washington American Psychiatric Press*.

Greenberg, J., Solomon., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, D., & Pinel, E. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 913-922.

本多潤子・桜井茂男（2000）．日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成．筑波大学心理学研究，**22**，175-182.

上出寛子・大坊郁夫（2009）．対人的な文脈における自己の多様性と精神的な健康の関連．パーソナリティ研究，**17**(9)，292-301.

川崎直樹・小玉正博（2007）．対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通構造としての自己概念の乖離性及び不安定性の検討．パーソナリティ研究，**15**(2)，149-160.

楠見孝（1995）．青年期の認知発達と知識獲得．落合良行・楠見孝編．「講座生涯発達心理学第４巻　自己への問直し－青年期」．金子書房，57-88.

桑原秀樹・坂戸薫・上原徹・坂戸美和子・佐藤哲哉・染谷俊幸（1999）．Interpersonal Sensitivity Measure (IPSM) 日本語版の作成－信頼性と妥当性の検討－．季刊精神科診断学　**10**(3)，333-341.

前田高幸，岩永誠，生和秀敏（2005）．自己愛傾向が行動的回避に及ぼす影響についての検討．広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編，**31**，31-41.

McCabe, R. E., Blankstein, K. R., & Mills, J. S. (1999). Interpersonal Sensitivity and social problem-solving: Relations with academic and social self-esteem, depressive symptoms, academic performance. *Cognitive Therapy and Research*, **23**(6), 587-604.

宮元博章（1996）．日本語版 Action Control Scale (ACS90) の作成と検討．兵庫教育大学研究紀要第一分冊，学校教育・幼児教育・障害児教育，**16**，23-33.

中山留美子（2007）．児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程－自己評価における評価過敏性，誇大性の関連の変化から．パーソナリティ研究，**15**(2)，195-204.

中山留美子・中谷素之（2006）．青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討．教育心理学研究，**54**，188-198.

大坊郁夫（2006）．コミュニケーション・スキルの重要性．日本労働研究雑誌，**546**，13-22.

Otani, K., Suzuki, A., Ishii, G., Matsumoto, Y., Kanata, M. (2008). Relationship of interpersonal sensitivity with dimensions of the Temperament and Character Inventory in healthy subjects. *Comprehensive Psychiatry* **49**, 184-187.

Rothbart, M. K., & Rueda, M. R. (2005). The development of effortful control. In U. Mayr, E. Awh, & S. Keele (Eds.), Developing individuality in the human brain: A tribute to Michael l. Posner. Washington DC: *American Psychological Association*. 167-188.

Sakado, K., Sato, T., Uehara, T., Sato, S., Sakado, M. & Kumagai, K. (1997). Evaluating the diagnostic specificity of the Munich personality test dimensions in major depression. *Journal of Affective Disorders*, **43**, 187-194.

佐藤哲哉・西岡和郎（1996）．うつ病病前性格研究の今日の動向ーメランコリー型性格に関する研究の今後の展開のために．臨床精神病理学，**17**，49-62.

佐藤徳，安田朝子（2001）．日本語版 PANAS の作成．性格心理学研究，**9**(2)，138-139.

Segal, Z. V., Williams, J. M. G., & Teasdale, J. D. (2002). *Mindfulness-Based Coginitive Therapy for depression*. New York: Guilford.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎（2008）．対人恐怖心性ー自己愛傾向２次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連．パーソナリティ研究，**16**(3)，350-362.

杉浦知子（2007）．ストレスを低減する認知的スキルの研究．風間書房.

杉浦義典（2008）．マインドフルネスにみる情動制御と心理的治療の研究の新しい方向性．感情心理学研究，**16**(2)，167-177.

杉山崇・坂本真士（2006）．抑うつと対人関係要因の研究：被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の研究．健康心理学研究，**19**(2)，1-10.

丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨・杉浦義典・毛利伊吹（1998）．抑うつと推論の誤りー推論の誤り尺度（TES）の作成ー．このはな心理臨床ジャーナル，**4**(1)，55-60.

山口正寛（2008）．回想された両親の養育スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，**1**(2)，173-181.

吉田琢哉（2007）．感情に関するモニタリングが，怒り感情の制御方略の使用に与える影響．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学，**54**，69-79.

（おの　えりか　昭和女子大学大学院生活機構研究科生）
（ふるかわ　まさと　昭和女子大学大学院生活機構研究科）